

▲投稿 用紙隨意左の所に送らるべし

伊勢國河藝郡稻生村 みどり短歌會内

眞宮 起雲宛

記者白す、眞宮先生は、特に本會員及本誌購讀者のために、和歌の選評をやつて下さることになつて居ます。斯道に志のある方は申すまでもなく、今から入門しようといふ方も奮つて御寄稿なさつて、お互に、清い樂としようじやありませんか。

多摩川の川上なる鶴の湯に
まかりける時よめる

埼玉桑田良隆

老しらぬ鶴のいでゆにゆあみして千歳の飾われも重ねん
寢覺めては雨かとはかり谷川の岩にせかるゝ音を忘れて

夢ひやにて

折にふれて

外國のふみはよむとも皇國の正しき道は忘れさらなん
思ひやれ支那のあら野に武夫かつゝを枕に明す夜毎を

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 毎月二十五日限り

一、披露 翌々月本誌上

一、賞品 天地人三座には景品を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にてても投吟する事を

得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)
住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛
にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

送を携く白も殘暑の匂ひかな
 稻妻や膳所の浮城ほの見ゆる
 月見舟水にまかせて流れけり
 重なりし鳥居潜れば青芒
 出來稻をほめく来るや着賣
 蛸や何處まで長き松の影
 明月や能くも揃ふた嘸好き
 蛸や今凱旋の夢さめて
 蛸や酒買ふて來た子にやみて
 送り出て大きく使ふ扇かな
 姫百合の咲き亂れけり一軒家
 月今霽雨の名所を數え見ん
 聞きなれし名は呼び易し女郎花
 根こざとは男の業か女郎花
 癩圖や石磊々と花薄
 罐詰の壺に活けたる桔梗かな
 流星の噂とりく盆の月
 涼しさや夕潮せまる涙ひさし
 鞍置た馬繫きけり夏木立
 千軒の薔に残る暑さかな
 夜の雨に秋の底聞く芭蕉かな
 戀に泣く佳人の宿や萩の花

[illegible]

燭取りて探る厨や虫の聲
法師一人尾花に暮るゝ麗かな
此處四坪桔梗薊苳並女郎花
背偲ばるゝ古城の跡や虫の聲
つゞれさす燈火淡し虫の聲
名月やこゝに一人の東坡ありて
七夕や筆太ぶとアイウエオ
月斜に武甲の峯や鹿の聲
月半ば雲にかくれて星まつり
七夕や晴れつ曇りつ宵の雨
氣持よき夜空となりぬ天の川
秋風や白砂青松磯の夕
秋立や芭蕉にさはぐ雨の風
彩りて月より高し秋の雲

三光

天秋立や野路行く僧の袂より
地餅搗て凱歌の村や今年酒
人朝寒や順禮一人森のかげ

追加

期や鬼の様なる雲去りて
香焚て裏に籠る身や秋の暮
雁啼くや方丈殿は旅の留守
水邊の四阿寂びて秋の雨
蜻蛉釣る榎の蔭や鬼子母神

[illegible]